

友定睦

## the mountain, drifting 山、漂流する

2023.3.11 (土) — 4.16 (日)

呉市立美術館

「現在、入船山記念館になっている建物は終戦前までは、呉鎮守府司令長官官舎として使用されていた。この建物は明治三十八年六月二日午後二時三十九分この地方を襲った大地震のため、以前のところに建てられていた長官官舎が崩壊したのでそのあと同じところに建てられたものである。」

「入船山記念館の建物について」(1968)

一、入船山記念館(元呉鎮守府司令長官官舎) p.1 より

呉・呉市入船山記念館／編

本作はこの美術館が位置する通称「入船山」のリサーチを通し、場と人の関係性を捉え直すことを試みた、映像と彫刻のインスタレーション。

ここはかつて亀山神社の鎮守の森であったが、明治時代に海軍に接收されたことで亀山神社は移動させられ、下士官兵集会所や呉鎮守府司令長官官舎が建てられた。おそらくその頃に亀山から「入船山」へと呼称が変わったのだろう。戦後はイギリス連邦占領軍の管理下におかれ、その後は国へ返還されたのち呉市へ譲渡、現在は入船山公園・入船山記念館として公開されている。

幾つもの変遷を経てきたが、この場を治める者が変わりながらも権威的・聖域的であり続け、多層な歴史による複雑さが魅力だと感じる。かつては誰かのための場であったが、今は誰のための場なのか、あらためてこの場と人の関係性を捉え直そうと「入船山」の記録に取り組んだ。

会場に設置された建物の彫刻は、現在の入船山記念館(呉鎮守府司令長官官舎)の前身にあたる、かつて存在した建物(軍政会議所兼水交社、明治天皇行在所、呉鎮守府司令長官官舎)を模したものである。この建物は呉鎮守府の開庁(1889年)にともなって建てられたが、明治芸予地震(1905年)で崩壊し、翌年その崩壊材を一部使用して現在の入船山記念館が建てられた。明治芸予地震の被害記録写真は国立科学博物館が所有しており、この彫刻はその写真をもとに立体化したものである。因みにこれらの写真以外にこの建物の実写記録は残っていない可能性が高い。(※この写真は入船山記念館の郷土館でも見ることができます。)この建物は呉における海軍の歴史、そして亀山ではなく「入船山」としての歴史を示す上で起点となる存在ではないかと考え、モニュメントとしてこの場に設置した。

この彫刻の背面には、現在の入船山を記録した映像作品がプロジェクションされている。この建物の背後に現在が映し出されている、あるいは映像側から彫刻を見ると現在の背後にこの建物が存在する、といったように鑑賞者の立ち位置によって時間の方向性を全く逆に捉えることができる。

映像作品では、山としての輪郭が捉えづらいこの場を、有識者や縁のある方々にガイドしていただいた様子が主に映し出されている。ドキュメンタリーのような形態だが、会話の中で語られる「入船山」は、史実や個人史、曖昧な記憶が混ざり合っている。また、歩きながら記録した映像から撮影者の身体性が強調され、うねるような一人称視点を通して鑑賞者には没入感と軽い酔いを促す。語り手や話題が不規則に入れ替わることで鑑賞者を翻弄するだろうが、このうねりに身を委ね漂流するように鑑賞してほしい。

映像の中では他に2つのイメージが要所で登場する。1つはイギリス連邦占領軍が撮影した写真、1つは入船山記念館のCG映像である。数ヶ月前に撮影した実写映像、約70年前に撮影された写真、計測し作成した3DCG、それぞれが時間や空間の隔たりをもったイメージであるが、全て「入船山」を対象とした記録であり、対照的にこれらを記憶したものは不特定多数存在する。数えきれないほどの眼差しと記録物によって「入船山」は現在も更新され続けていると考える。時間や空間の隔たりを超えて「入船山」の捉え直し、この場の新しい視座を獲得できれば幸いである。しかし、この作品も更新され続ける「場の記憶」のタイムライン上では一瞬に過ぎ去っていくものの1つに過ぎないだろうが、作品を観ていただいた方に入船山公園やその周辺を散策してもらえれば記録の更新が伝染しているようで面白い。

本展に向けて漠然と呉市について調べ始めた時、亡き祖父が海軍で青春時代を過ごしたことを、広島に住む私によく話してくれたことを思い出した。(祖父は呉に居た訳ではないが、広島といえば呉、という感じで海軍の話をよくしてくれた。)私に長話をする祖父に向かって、祖母は迷惑そうに少し怒りながらも「青春やから仕方ないね」と愛想を尽かすようにぼやいていた。そんなことを思い出しながら軍都として栄えた呉の史跡を巡っていると、呉市立美術館が建つ入船山公園やその周辺が海軍用地であったことにふと気付く。こんな真ん中で展覧会をするならこの場と関わっていかうと思ったのが制作の出発だった。呉に対して軍都や戦史といったイメージが先行する中で、祖父の「青春」という真っ直ぐな言葉がずっと引っかかり、そのアンバランスさによって一義的な見方にならずよかったと思う。

リサーチを進める中で、第二次大戦中の軍事機密保持対策によって生まれた「空白」に興味を抱いた。それは例えば、終戦間際はより一層厳しくなったことで、その頃に撮影された写真や風景画がほとんど存在していないことや、地図や絵葉書には元の景色がわからないよう加工し販売されていたことなどがあげられる。この時期の記録物が多く欠けていることにこそ主張性を感じ、どんな記録よりもこの空白たちが時代背景を物語っているように思う。対照的に、今日は誰しものが自由に写真を撮りすぐさまSNSを通じて世界中に発信することができる。記録行為が制限されていた時代を経て、今日は同じ風景を当たり前のように記録できることに少し不思議な気持ちを抱きながら、「入船山」の記録に取り組んだ。

2023年3月  
友定睦



The mountain, drifting / 山、漂流する 2023  
シングルチャンネル・ビデオ インスタレーション 51分22秒 (映像)